View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

provided by Kyoto University Research Information Repository

KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

KYOTO UNIVERSITY

Title	中國小說史略考證 第二十五
Author(s)	中島, 長文
Citation	中國文學報 (2007), 74: 66-98
Issue Date	2007-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/177999
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

中國小說史略考證　第二十五

中島長文

まえがき

ここに掲載するのは、魯迅著『中國小說史略』に關する注釋考證で、『神戸外大論叢』（第三十八卷第二號一九八七年至第五十四卷第三號二〇〇三年）に掲載された第一篇至第二十篇、また神戸市外國語大學研究叢書第三十四册（二〇〇四年）として公刊された第二十一篇至第二十四篇の『中國小說史略考證』を承けるものである。直接の對象とした『中國小說史略』は人民文學出版社一九八一年版全集第九册であって、文中「新版全集」と稱する。最新版の二〇〇五年版ではない。各篇は大體において一段落を一纏まりとして通し番號をつけ、最初の行末に一九八一年版の頁數と行數を示した。＋は前からの行數、－は後ろからの行數を示す。その他敍述の原則については第一號の「凡例」を參照されたい。ただ長年にわたる作業なので敍述の體裁は途中で少しずつ變っている部分がある。全體の原稿はすでに完成しているが、全二十八篇あるのでこの掲載も數年にわたる豫定である。

第二十五篇　淸之以小說見才學者

1以小說爲庋文章之具、以至則乾隆中蓋尙存　　二四二十一

『大略』寫印本にはこの篇に該當する記述がなく、『大略』鉛印本第二十三篇ではじめて增補された。

『史略』各版間の異同は、「遍歷燕晉秦隴」の「遍」字、第三版より三十八年版全集まで「偏」に誤る。なお「（自是）」は初版まで地の文として前後に」「が附されていたのを、合訂再版で「　」に括り、訂正版で（　）に入れた。

趙氏『中國小說史略傍證』一二二頁云、『古今小說評林』（一九一九）張冥飛云、「小說中之自誇學問者、必其學問尙

有可觀者也。如『鏡花緣』、『花月痕』雖無甚道理、而作者之胸中腕底、究竟寫得出幾行文字來也。卽至不堪、如『野叟曝言』、亦能推陳出新、放膽胡說。」魯迅が「小說中之自誇學問者、必其學問尙有可觀者也」という意見をそのまま肯定したとはとても思えないが、「小說中之自誇學問者」に言及したものとしては『史略』以前になる。

西岷山樵「野叟曝言序」云、康熙中、先王世祖韜叟、宦遊江浙間、獲交江陰夏先生。先生以名諸生貢於成均、旣不得志、乃應大人先生之聘、輒祭酒帷幕中。遍歷燕晉秦隴、暇則登臨山水、曠覽中原之形勢。繼而假道黔蜀、自湘浮漢、溯江而歸。所歷旣富、於是發爲文章、益有奇氣、先生亦自負不凡、然首已斑矣。先生世祖以官事過禾中、邂逅一次、一見傾倒。旋吳之後、文宴過從、殆無虛實、先生亦幸訂交於先祖。屛絕進取、一意著書、閱數載、出野叟曝言二十卷以示、先祖始識先生之底蘊、於學無所不精、亟請附梓。先生辭曰、盛世不得以文章經濟顯於時、猶將以經濟家之言、上鳴國家之盛、以與得志行道諸公相印證。是書託於有明、窮極宦官權相妖僧之禍、言多不祥、非所以鳴盛也。先祖頷之、因請爲之評注、先生許可。乃乘便繕副本藏諸篋中、先生不知也。先生旣歿、先祖解組歸蜀、風雨之夕、出卷展讀、如對亡友。嘗謂曾祖光祿公曰、爾曹識之、承夏先生之志、愼勿刊也。自是什襲者又百有餘年矣。

乃今夏六月、余友程子自海上購得此書、以予好讀奇書、持以相贈、不覺大詫。余友爲述刊書之由、始知是書成於吳中書賈、而出之者——夏先生之後人也。然已缺失十一、不若吾家副本之全。余惟夏先生之爲人、著述震海內、傳世之文、當非一種。是書杼寫憤懣、寄託深遠、誠不得志於時者之言、故深自祕靳、而不欲問世。今則去先生之世已遠、無所忌諱、其後嗣旣出其書矣。徒以兵燹剝蝕、使海內才人皆抱殘守缺之憾、幷無以知余祖與先生之交、及當日愼重勿刊之意矣。夫後世不以是知先生、先生亦不以是書見知、均之已矣。旣以是知、而仍無異乎勿知、則亦非吾祖之所樂也。爰出全書以附余友、達諸海上之刊是書者、亟謀開雕、讀者快睹其全書、幷述藏書之由、以告夏先生之後人、證二百年前之交契云。　光緒八年歲次壬午九月西岷山樵謹識。

人民中國出版社本

金武祥「江陰藝文志凡例」云、一小說平話、如夏二銘先生之野叟曝言、屠笏巖先生之諄史、……今一遵四庫總目體例、概不列入。　光緒辛卯粟香室刊本

金武祥『江陰藝文志』卷下云、經目擧正　經史餘論　全史約編　學古編　唐詩臆解　亦吾吟　鼠肝集　五都吟　吳繞吟　瓠戍吟　韎鞨吟　浣玉集詩鈔二卷續四卷　夏敬渠字懋修撰、　前四部見縣志、餘見江上詩鈔。　同上。文中「經目擧正」とあるのは「綱目擧正」の誤刻である。

『小說舊聞鈔』『野叟曝言』云、『江陰藝文志』凡例　夏二銘先生之『野叟曝言』。

又云、『光緒江陰縣志』十七文苑傳　夏敬渠字懋修、諸生、英敏績學、通史經、旁及諸子百家禮樂兵刑天文算數之學、靡不淹貫。壯游京師、有貴顯聞而致焉、議偶不合、指斥不稍避、致爲動容加禮、欲延致賓館、敬渠謝弗往。生平足跡幾徧海內、所交盡賢豪。著有『綱目擧正』、『經史餘論』、『全史約編』、『學古編』、詩文集若干卷。

魯迅案：志列敬渠於趙曦明之後、鳳應韶之前、則乾隆時人也。所著四種之外、金武祥『江陰藝文志』（下）又擧有『唐詩臆解』、『亦吾吟』、『鼠肝集』、『五都吟』、『吳繞吟』、『瓠戍吟』、『韎鞨吟』、『浣玉集詩鈔』二卷續四卷。注云、「見江上詩鈔」。「小說小話」云、「二銘有『種玉堂集』。」半農見借『浣玉軒集』一部、凡四卷、題曾姪孫子沐輯校。首有「浣玉軒著書目」、爲『綱目擧正』四卷、『全史約論』無卷數、『醫學發蒙』四卷、『浣玉軒文集』四卷、卽合『經史餘論』及『學古編』等所成、『浣玉軒詩集』二卷、則輯『亦吾吟』、『向日吟』、『五都吟』、『鼠肝吟』、『吾繞吟』、『韎鞨吟』、『瓠戍吟』等編爲一者也。又有『唐詩臆解』二卷。諸書爲嘉慶間其子祖燿所輯、今皆不存。『綱目擧正』下有祖燿案語云、「是書既成、攜入閩中、祈故友福建撫軍富公綱奏呈、未果、歸、遇乾隆丙午南巡、赴蘇迎鑾、擬躬進獻、又有所阻」云云。今俗傳二銘將獻『野叟曝言』、爲其女設謀阻止者、蓋卽由此誤傳。魯迅が言う誤傳は、『小說考證』卷八の「花朝生筆記」にいう所と思われるが、他にも趙景深が「『野叟曝言』作者夏二銘年譜」（『中國小說叢考』）に引く何聽松「野叟曝言補聞」（『澄江舊話』卷二）の二說があり、又錢靜方『小說叢考』が

阻止した者が妻と娘の違いはあれ、夏敬渠に『野叟曝言』の獻上の意があったことを言う。

『江陰夏氏宗譜』巻八云、敬渠字懋修、邑痒生。英敏果毅、正直不阿、權貴無所干避、崇儒學、力辟二氏。通諸經、歷代史志、旁及諸子詩賦、禮樂兵刑錢穀醫算之屬、無不淹貫。以冠軍詠芹、壯游京師、有某王聞而致焉。攝布衣、抗首座。王卽席講論、議偶不合、直斥其非、折以正義。席貴皆縮頭、王爲動容加禮。越日、託款密者傳意、延爲館賓、引古外交戒力却之。平生足跡、幾遍宇內。所交必賢豪、鉅公名卿、尤見推重。七秩稱慶、怡親王遙祝以額曰、「天隲耆英」。丁酉恩綸有云、「秉心醇朴、飭行端方」。人謂雖屬通詞、其當此無愧者、惟公庶幾。著有『經史餘論』、『全史約論』、『學古編』、『亦吾吟』、『浣玉軒文集』、『唐詩臆解』諸書。

又巻四云、宗泗次子、字懋修、號二銘、邑痒生、貤封登仕郎、直隷保安州吏目。康熙四十四年乙酉五月初九日亥時生、乾隆五十二年丁未三月二十二日亥時終、葬留龍綱崗莊後父塋昭穴、丁山癸向兼午子。著有『綱目舉正』、『全史約論』、『浣玉軒文集』、『唐詩臆解』、『醫學發蒙』。配朱氏邑痒增生禹臣公諱作霖女。繼配黃氏、青暘邑痒廩生于岡公長女。子一、祖焞、繼配出。女一、適虹橋太學生。以上源遠堂本、今據『中國小說史料』引。

右の書は魯迅が見るに及ばなかったもの、後に發見され孔另境編『中國小說史料』（中華書局版）に收錄された。この書は魯迅が死去の直前、一九三六年十月十一日編者から送られていることが日記に記されている。後これによって趙景深は「『野叟曝言』作者夏二銘年譜」を書いた（一九三七年、後『中國小說叢考』收錄）。これは基本的には魯迅が見た史料とそれほど違わないが、生卒年は巻四の記述で明確になった。康熙四十四年（一七〇五）―乾隆五十二年（一七八七）、八十三歲と長命であった。

『野叟曝言』の版本　一本は著者の子孫が刊行したという光緒辛巳毘陵彙珍樓活字本二十巻百四十二回で、これは『史略』のいう「印行時、已小有缺失」本である。もう一本は「獨全、疑他人補足之」という、光緒壬午八年申報館排印本である。同じく二十巻だが百五十四回ある。この二本は日記にも『魯迅藏書目錄』にも著錄がない。魯迅は兩

本を見た口ぶりだが、詳しいことは分からない。本篇**2**で「回數多至百五十四回」というのは他人の增補かと疑った申報館排印本の系統だが、第一回の引用文だけではどちらに據ったのかは分からない。なお毘陵彙珍樓本は百五十二回と稱するが、實際は回目のみあって本文がない部分もあるので計百四十八回本ということになる。魯迅が百五十四回本を「他人の增補」かと疑ったのには、黃人「小說小話」に「野叟曝言、作者江陰夏某（名二銘。此書原缺數回、未刊、不知何人補全、先後詞氣多不貫）」とあるのにも據るだろう（全文見本篇**3**引）。しかし最近になって光緒四年（一八七八）の日附けを持つ鈔本が發見され（中國社會科學院文學研究所藏）、それが申報館本と合うところから、申報館本は他人の增補本ではなく原本を正しく傳えたものと考えられるようになった。石昌渝「野叟曝言前言」（一九九三年作家出版社）參照。百五十四回本は他に淸末（？）石印本があり、知不足齋主人評本（東文研雙紅堂文庫藏）等がある。近刊には作家出版社本、一九九三年人民中國出版社本があるが、前者には删節がある。彙珍樓本の影印には一九九〇年上海古籍出版社古本小說集成本、民國七十四年臺北天一出版社明淸善本小說叢刊初編本がある。

これまで『野叟曝言』についての研究は殆どなく、最近になってようやく幾つかの研究が公にされるようになった。そうした中で吳靜媛の博士論文「小說における儒教思想：『野叟曝言』の研究」（»Confucianism in fiction: A Study of Hisa Ching-chu's Yeh-sou p'u-yen.»1993, Harvard Univ.）は、儒教思想のみならず、『野叟曝言』を文學作品として本格的に取り上げた殆ど最初の研究であり、その正確な分析と衒いのない論證はこの書を論ずる場合必讀の文獻だと思われるが、未公刊のなのが惜しまれる。

『師弟答問集』八十六頁云、〔增田問云〕303頁2行「以名諸生貢於成均、…成均＝モト古ノ大學ノ名デアルガ、淸朝デハ（？）貢生ヲトル、試驗場ヲ云フ　右ノ如ク成均ヲ解シテハ如何デセウカ？又ハ貢生ヲ入レル學校？（ソンナ學校ガ有ッタカ？）　〔魯迅對「又ハ云々」答云〕yes. 秀才ガ貢生ニ擧ラレバ成均（昔ノ大學、後來ノ國子監）ニ行イテ勉強ス可キモノデスガ實ハ肩書バカリデ行カナイ、

貢生ヲトル試驗ハ地方デヤルノデ「成均」ニデモナイ、ダカラ「成均」ハ秀才ノ升學スル處デ試驗場デハナイ、

2『野叟曝言』龐然鉅帙、以至爲萬流宗仰而已〕

二四二－五

『史略』各版間の異同　「鎔經鑄史」五十七年版全集に至って「鎔」字を「熔」字に改たむ。「敍事」以下「壁邪說」まで、『大略』鉛印本、初版には讀點なし。「胸羅星斗」の「胸」字、合訂再版より第七版まで、「腦」字に誤る。「則伯仲諸葛、」の讀點、初版より第七版まで句點に作る。「壇場」の「場」字、五十七年版全集始めて「靖」字を改め「場」字に作る。これは佛道對比しての表現であるから、「壇靖」ということばがある以上舊に復すべきである。所謂後人の妄改である。

第一回引用文　「閑涉岐黃」の「閑」字、申報館本を底本とする人民中國出版社本、作家出版社本、また知不足齋主人評本もともに「間」字に作る。これは『大略』鉛印本から三十八年版全集まですべて「間」に作り、五十七年版全集で「閑」に改められたが、これも誤改で「閒」ないしは「間」とすべきである。この書は『魯迅藏書目錄』や日記にも著錄はなく、魯迅がどういうテキストに據ったのか未詳。

『師弟答問集』八十六頁云、〔增田問曰、〕304頁3行　以「奮武揆文、天下無雙正士；鎔經鑄史、人間第一奇書」、二十字編卷、　右ノ二十字ニアラハレタ意味內容デ編卷シタノカ？　or二十字ノ一字一字ヲ以テ編目ノ名題トシタノカ？

〔魯迅答曰、〕作者ハソノ本ヲ二十册ニ分ケテ出版スルツモリナノテ、コノ二十字ヲ數目字、代用トシテ每册ノ表面ニ一字ヅツ書クノデス、例ヘバ、

野叟曝言　一

ト書ク可キモノハ、「一」トカカナイデ、次ノ樣ニスル

野叟曝言　奮

而シテソノ二十字ハ、カタ一方本ノ內容ヲ自書自讚シテ居ル

3『野叟曝言』云是作者〝抱負不凡〟、以至或誤以『野叟曝言』爲宗瀾作　二四三－七

『史略』各版間の異同は、初版が「嘗從之問『易』」の「嘗從」二字を顚倒する以外にはない。

「野叟曝言凡例」云、作是書者抱負不凡、未得黼黻休明、至老經猷莫展、故成此一百五十餘回洋洋灑灑文字、題名曰野叟曝言、亦自謂野老無事曝日清談耳。

原本編次以「奮武揆文天下無雙正士、鎔經鑄史人間第一奇書」二十字分爲二十卷、是作者意匠經營、渾括全書大旨。今編字分卷、概仍其舊。

是書之敍事說理、談經論史、敎孝勸忠、運籌決策、藝之兵詩醫算、情之喜怒愛懼、講道學、辟邪說、描春態、縱諧謔、無一不臻頂壁一層。至文法之說想、布局映伏鉤綰、猶其餘事。爲古今說部所不能仿佛、誠不愧第一奇書之目。

書中間有穢褻、似非立言重敎之道。然統前後以觀、而穢褻之中、仍歸勸戒、故亦存而不論。稗官野史、本非紀事之體、間與正史相合、亦有不合者、此書截成化十年以後太子監國之年、而下移武宗之年歸弘治、而終於三十三年。蓋不如是不足以暢作者之心。而有弘治十八年天子病愈改元厭哭一事隱存、正史之實、自可按合。閱者勿以爲虛而無徵也。

此書原本、評注俱全。其關合正史處、一一指明。如景王之爲宸濠、安吉之爲萬安劉吉、法王之爲妖僧繼曉、皆一望而知。熟於有明掌故者、自可印證、不以無注爲嫌也。

人民中國出版社本

毘陵彙珍樓活字本「野叟曝言凡例」云、

一、此書因有缺失、從未刊刻。兵燹後、抄本又多遺闕、恐滅沒無傳、有負作者苦心、故特覓舊本集腋成裘、勉力附梓。至間有亥豕魯魚、或由舊本抄寫舛錯、以訛傳訛、或由校者心粗目贊、似是而非、或由居停之間斷吾讎、印司之更易誤置、難免增脫倒譌等咎、閱者諒之。

一、缺處仍依原本、注明下缺、不敢妄增一字、貽笑大方。乃閱者不免以未睹全書爲憾、然終無可搜羅。姑爲刊出、以俟高才補續。　據中國歷代小說序跋集引。

右の彙珍樓本の凡例は、申報館本（ここでは人民中國出版社本）の「書中有穢褻、……故亦存而不論」という一節の後

に續くものである。このことから申報館本の序は、前の一項までを數字を外して彙珍樓本の凡例を襲い、「稗官野史、本非紀事之體」から最後までを書き換えたと考えられる。後に魯迅は、林語堂の『野叟曝言』を稱讃するような文章に對する聶紺弩の批判に觸れたついでに、『野叟曝言』は「不錯、這一部書是道學先生的悖慢淫毒心理的結晶」（『全集』第六卷「且介亭雜文二集」〝尋開心〟一九三五年三月）と述べている。

『四庫全書總目』卷六、易類六云、周易通論四卷　國朝李光地撰。光地字厚菴、安溪人。康熙庚戌進士、官至大學士、謚文貞。是書綜論易理、各自爲篇、一卷二卷發明上下經大旨、三卷四卷則發明繫辭說卦雜卦之義、冠以易本易敎二篇、次及卦爻象彖時位德應河圖洛書、以及占筮卦力正變、環互無不條析其意、而推明其所以然。在宋學中、可謂融會貫通卓然成一家之說、其論復無妄、中孚離四卦爲聖賢之心、學亦皆以消息盈虛觀天道、而脩人事、與慈湖易傳以心言易者迥殊。光地作大學古本說、序稱於易之卜筮、灼然無疑。蓋宗旨旣明、則卮言不得而淆之矣。其學一傳爲楊名時、有周易箚記二卷。再傳爲夏宗瀾、有易義隨記八卷、易卦箚記二卷、雖遞相祖述、而其宏深簡括、則皆不及光地也。

又卷六、易類六云、周易箚記二卷　國朝楊名時撰。名時字賓實、江陰人。康熙辛未進士、官至禮部尙書、謚文定。是編乃其讀所記、前後無序跋、未詳其成書年月、觀書中所引證、蓋猶在欽定周易折中之後也。名時本李光地所取士、故其易學多得之光地、雖說卦傳及附論啓蒙之類、頗推衍先天諸圖、尙不至支離附會。至其詮解經傳、則純以義理爲宗、不涉象數、大抵於程朱之義不爲苟異、亦不爲苟同。在宋學之中、可謂明白而篤實矣。名時爲雲南巡撫時、夏宗瀾嘗從之問易、所作易說皆質正於名時、其問答具載宗瀾著中。然宗瀾所說、如漸卦禦寇、證以孤雁打更之類、頗爲膚廓、不及名時所論猶有光地之遺也。

金武祥『江陰藝文志』下云、楊氏全書易經箚記三卷詩經箚記一卷四書箚記四卷經書言學指要一卷太學講義一卷學庸講義二卷程功錄四卷文集十二卷別集六卷附錄二卷共三十六卷辟雍講義一卷　武祥謹按、辟雍講義當卽太學講義、全書有葉氏舊刻本。

又卷十、易類存目四云、易義隨記八卷　國朝夏宗瀾撰。宗瀾字起八、江陰人。由拔貢生薦授國子監助教。是編乃宗瀾恭讀御纂周易折中、意有所會、卽標記之、多因集說而作。時宗瀾方從楊名時於雲南以修周易折中、時李光地爲總裁官、而名時爲光地門人、故參互以光地榕村易解、就正於名時以成此書。其體例在講章語錄之間。凡問者皆宗瀾語、答者皆名時語也。兩江總督採進本內末有附刻一卷、皆從名時文集中採錄、其鄉賢夏君傳一篇、卽爲宗瀾之父調元作。此本無之、殆以其疣贅删除歟。又　易卦箚記四卷　夏宗瀾撰。（今從略）。

金武祥『江陰藝文志』下云、易義隨記八卷　易卦箚記四卷　詩義記講四卷　夏宗瀾撰　見四庫存目。

又『江陰藝文志』下云、易學大成　讀書疑義隨記　春秋四傳集解　周禮集傳　儀禮疑義集錄　禹貢說　洪範說　經義守約　道學宗旨　喪禮纂論　格致彙辨　見聞論要　讀史隨筆　農商問答　夏祖熊字夢占撰　見縣志。

『小說舊聞鈔』「雜說」引黃人「小說小話」云、野叟曝言作者江陰夏某（名二銘、著有『種玉堂集』、亦多偏駁。此書原缺數回、未刊、不知何人補全、先後詞氣多不貫）、文白卽其自命、蓋析夏字爲姓名也。康熙中、當道諸公爭尙程朱學說、而排斥陸王、作者曾從某相國講學、故雅意迎合、書中所謂時太師者、雖若影射彭時、實指某相國也。其平生至友爲王某、徐某、則所謂匡無外、餘雙人者是也。同邑仇家周某、則所謂吳天門者是也。夫小說雖無所不包、然終須天然湊合、方有情趣。若此書之忽而講學、忽而說經、忽而談兵論文、忽而誨淫語怪、語錄不成語錄、史論不成史論、經解不成經解、詩話不成詩話、小說不成小說、『雜事祕辛』與昌黎『原道』同編、香奩妝品與廟堂禮器並設、「陽阿」、「激楚」與「雲門」、「咸池」共奏、豈不可厭？且作文最患其盡、小說兼文學美術兩性質、更不宜盡、而作者乃以盡一字爲其唯一之妙訣、眞別有肺腸也。其竭貢獻尊王法聖之奴隸性、以取媚於權要者、固無足深論矣。

「夏」字析字說は黃人のこの文を指すのだろうが、夏宗瀾作者說の出處は未詳。

4 欲于小說見其才藻之美者、以至則紳死矣　二四四＋一二

『大略』より五十七年版全集まで、小停道人の序を「六年四月」とするが、新版全集で「五年四月」と訂された。序は後に見るように「時龍集上章涒灘餘月既望」とするから、「上章、涒灘」は庚申で嘉慶ならば五年（一八〇〇）だから新版の訂正に倣うべきである。他に異同はない。

『小說舊聞鈔』『六合內外瑣言』『蟫史』引金棒閭『客窗偶筆』云、余家半里許西觀村屠氏、世業農。屠氏子名紳字笏巖、鄉會聯捷、授雲南師宗令、擢尋甸州牧、今任廣州別駕。……笏巖幼孤、資質聰敏、蚤擅才名、年十三遊邑庠、十九捷鄉薦、二十成進士。……歲丁未、笏巖遷尋甸州刺史、入覲回滇、過常郡、余與晤於蔣穎州太守立庵、燈昏晝燭、鼓打譙樓、爲余歌「赤壁賦」、余顚「鳳凰臺上憶吹簫」贈之。……迄今魚雁音乖、雲山望香、四方奔走、故我依然、而每憶浩歌、猶覺洋洋盈耳也。　據『鶚亭詩話』附錄抽引。

又引「習園藏稿鄂亭詩話合序」云、……余先生懇摯周洽、相對如老經師。屠先生則負不可一世之概、揮金如土、避俗若仇、於今人中皆不能多見者。辛酉春夏間、豫以選人赴吏部、屠先生適候補入都、飲酒賦詩、晨夕相往來。豫出京十二日、而先生頓卒於客寓。遺愛云亡、老成凋謝、晨星零雨、愈用黯然。……　據『鶚亭詩話』附錄抽引。

又引『江陰縣志』十四選舉表云、屠紳、乾隆二十七年壬午鄉舉、乾隆二十八年癸未甲科。字賢書、尋甸州知州。

金武祥『江陰藝文志』下云、鶚亭詩話一卷附詩一卷　六合內外瑣言二十卷　屠紳字賢書撰、詩話詩有粟香室刻本、瑣言有上海鉛版印本。

近年屠紳の履歷をまとめたものに沈燮元『屠紳年譜』（一九五八年上海古典文學出版社）がある。

『小說舊聞鈔』『六合內外瑣言』『蟫史』引金武祥『粟香隨筆』二云、屠笏巖刺史名紳、又號賢書、所居西貫、與余居前後相望。先曾祖『客窗筆記』中「屠氏善報」一條、卽紀其先代積累之由、今則式微甚矣。所著有『六合內外瑣言』二十卷、署黍餘裔孫編、『蟫史』二十卷、署磊砢山人撰。近年上海以洋版刷印、流傳頗廣。洪稚存太史言其詩如蓄沼文魚、栽盆紅藥。庚申亂後、迄未見其詩集也。余「雜憶鄉居」詩云、「州守風流憶往時、笏焉舊澤鮮留遺、『瑣言』『蟫史』猶傳遍、不見文魚紅藥詩。」

又引『粟香三筆』五云、陸祁先生「崇百藥齋五哀詩」、「哀廣州通判屠君紳」云、「心期鬱鬱向誰陳、論定斯人我最眞、遊戲文章都奥衍、猖狂意氣激酸辛。憐才熱淚傾如水、垂老柔鄉葬此身、卻悔臨歧殊草草、危言含意未全伸。」卽詠吾鄉笏巖刺史也。其所著『六合內外瑣言』初名『璅蛣雜記』、吳穀人祭酒有序、乃以吳錫麒署姬金麟、其詼諧如此。

『六合內外瑣言』及『蟫史』二種、縣志皆不載、僅載其「酌酒與儲玉琴」詩一首云、「當筵那復問悲歡、念爾茫茫感百端、風雨十年家鐵甕、雲山一夕話銅官。誰憐冷鍛嵇康竈、我愧虛彈貢禹冠、今夜蓉城好名月、醉中猶得坐團圞。」余見『亦有生齋集』有「屠賢書詩序」、稱其曠朗出塵、時得神解、惜無由見其全集也。

又「雜說」引黃人『小說小話』云、『蟫史』此小說中之協律郎詩、魁紀公文也。書中主人甘鼎、蓋指傅鼐、傅之材力、在明韓襄毅、王威寧右、而未竟其用、舉世悼惜、故好事者撰爲是書、以同時一切戰績、歸傅一身、致崇拜之意。但懼干忌諱、故出之以廣詞隱語、飾之以牛鬼蛇神、以炫閱者耳目。但細考之、書中人物事跡、仍歷歷顯露。（如石玉之爲琅玕、余舜佐之爲李侍堯、斛斯貴之爲福康安、賀蘭觀之爲海蘭察、龍木蘭之爲龍幺妹、木宏綱之爲柴大紀、梅颯采、嚴多稼之爲林爽文、莊大田。其餘若羣網、鶩鶩二城、則諸羅、鳳山也。青黃黑赤白五苗、則九股十三姓諸種也。五斗米賊、則川陝各號之白蓮教匪也。當時朝議甚惜齊王氏之才、有欲撫之使平苗自贖者、故尊之爲鎖骨菩薩、別樹一幟、不混於五斗米賊中。陳文述曾令常熟、爲諸士所推服、所謂都毛子者、殆卽其人也。餘不備述。）雖章回小說乎、而有如『莊』『列』者、有如『竹書』『路史』者、有如『易林』『太玄』者、有如『山海』『岳瀆』『神異經』者、有如『雜事祕辛』『飛燕外傳』『周秦行紀』者。蓋奄有『水滸傳』『西游記』『金瓶梅』諸特色、而無一語襲其龔臼、雖好用詞藻、及侈陳五行禨祥、而乏眞情逸致、然不可謂非奇作也。小說界中之富於特別思想者、除『西遊補』外、無能逮者、但不便於通俗耳。按此書筆意、頗與說部中『璅蛣雜記』（一名『六合內外瑣言』）相似、但彼係散篇、此爲長本、勞逸難易固不同也。乾嘉中文字、能爲此狡獪伎倆者、惟舒位、王曇、究不知誰作也。（或卽舒位所作。蓋舒參戎幕時、

曾與劉幺妹有情愫、其贈詩所謂「上馬一雙金齒屐、乘鸞十八玉腰奴」者是也。書中盛述木蘭神通、若有味乎其言之、當非無故。而所謂桑蛸生者、意卽作者自指焉。）

小停道人「蟫史序」云、蓋聞人爲倮族之一蟲、苟蠕蠕焉、無所建白於世、幾乎不與毛者介者幷囿於混沌之天矣。其或不安於蠢類、抱缺守殘、以求親媚於古人。及叩以文謨武烈之旨、輒睒目捲舌、詫爲不經、曾不若蠹魚之獲飽墨香古澤、又安望啓沃群倫主持風雅哉。我用是深有感於人之爲蟲、而蟲之所以爲人矣。太上之詣、在究澈於五賊三盜、通達元化、貫串古今。抽其餘緒、一顰一笑、足以震驚聾瞶、非若掇拾唾餘、攘襲糟粕、擾襲緒之多端、侈瞶丸爲善轉、而猶詡詡自鳴得意也。雖然厭故喜新、輿情比比、擧凡鴻文巨製、洵足解脫蟲煩、撥登覺路、獨奈何見卽生倦、反不若稗官野乘、投其所好、尙堪觸目警心耳。矧驅牛鬼蛇神於實錄中、用彰龜鑑。化蟲爲蟫、恣其游泳、水卽涔蹄、未始非世道人心之一助。此磊砢山人蟫史之所由作也。夫翹首言天、顯告以三垣列宿之升恒、日月五星之躔次、禨祥所兆、切系乎人、而習焉不察者、鮮不以迂誕笑之。試爲浮西域、跋大狼、指赤道南偏、附極諸辰而數之曰、此朱鳥所屬之飛魚、海石、南船、海山、十字、蜜蜂、小斗、馬腹、馬尾九星也。此蒼龍所屬之異鳥、三角、孔雀三星、以及玄武之波斯、鶴、鳥喙、蛇尾四星。白虎之水委、蛇首、蛇腹、附白、夾白、金魚六星也。靡不瞠目聳耳、游神象外、而抑知同麗樞衡、豈遂別開儀界哉。於是嘆蟫史之作、其苦心殆有類乎擧極云爾。山人曰、然。是爲敍。時龍集上章涒灘餘月旣望、小停道人書於聽塵處。　今據『中國歷代小說序跋集』一四二八頁所引庭梅朱氏刊本。

傅鼐（一七五八―一八一一）『淸史稿』三六一に傳あり、「字重庵、順天宛平人、原籍浙江山陰」と言う。嘉慶元年から十年にかけての度重なる苗族の反亂を鎭壓した功績で、同十四年湖南按察使に拔擢された。

5『蟫史』首卽言閩人桑蠋生海行、以至言將度庾嶺云　二四五‐四

『史略』各版間の異同「六子攜持極老人口授」の「授」字、『大略』鉛印本のみ「援」に誤る。引用文中「漢將不敢見

陣耶?」の疑問符、『大略』鉛印本及び初版は「!?」に作る。「見獼猴擲身入」の「獼」、合訂版より五十七年版全集まですべて「獮」に誤る。「木蘭呼鱗介士百人」の「鱗」、『大略』鉛印本のみ「麟」に誤る。

『魯迅藏書目錄』小說類云、蟫史二十卷　清磊砢山房主人著　上海申報館仿聚珍板印本　六册

版本には嘉慶五年序のある庭梅朱氏藏版本があり、所謂磊砢山房原本とはこれを言うのであろう。他に魯迅の所藏する申報館本がある。日記には著錄されないので、おそらく現存する日記以前の收藏かとも思われる。近刊には一九九二年人民文學出版社「中國小說史料叢書」本があり、これは庭梅朱氏本を底本に、申報館本を參照している。なお上海古籍出版社古本小說集成には嘉慶五年序刊本が影印されている。

いま申報館本と人民文學出版社本によって對校する。第一回引用分に異同はなく、卷九引用では「是爲蠱妖之……」の「蠱」字、申報館本に同じく、人民文學版では通行の「鮮」字に改めてある。卷二十では「持向萬赤頂骨……」の「持」字、兩本共になく、「擧手振一雷」の「振」字、兩本共に「震」字に作る。「入之」申報館本「人之」に誤まり、「固儼然盲僧焉」の「儼」字、申報館本「儷」字に誤る。また「某當初疑萬赤先亡」の「初」字、兩本共に「時」に作る。以上からすると魯迅は庭梅朱氏本を見ていないとは斷言できないが、申報館本に據って不通の箇所は意を以て改め、或いは誤寫した可能性が高い。

『師弟答問集』九〇頁云、〔增田問曰、〕309頁7行　是爲蠱妖之「窮神盡化」云。…「――」ト云フコトダ。? or 云云?（云字ハ原文ノ文字カ?又ハ著述ノ加ヘタ文字カ?）〔魯迅答曰、〕「云」ハ私ノ言葉デ「ト云フコトダ」、「デアルサウダ」ナドノ意味

又八八頁云、〔增田問曰、〕309頁最末行　砉然。砉ノ發音ヲ教ヘラレタシ。ローマ字デ。日本デハケキ、クワクナドト讀マセマスガ。〔魯迅答曰、〕HUWA！張物ヲ迅速ニ板カラ引リハナストコンナ音ヲスル。肉屋ガ巧ニ肉ヲ骨カラ切リハナストキニモコノ字デ形容スル、

又九〇頁云、〔增田問曰、〕311頁1行　甘鼎亦棄官去、言將

度廋嶺云。　云云？ or ト云フコトダ？

〔魯迅以增田所誤「廋」字改作「庾」、而對「云云？」答曰、〕yes 其ノ本ニ……ト云フ

6 『蟫史』神態、以至足稱獨步而已　二四七十八

『史略』各版間に異同はない。

『小說舊聞鈔』『六合內外瑣言』『蟫史』引洪亮吉『玉麈集』上云、屠進士紳弱冠卽通籍。其爲詩有雋才、余最愛其「佳禾篇贈何明府」云々、七古「送陳伯玉」云々、「十月朔偕黃仲則飲旗亭」云々、「憶上人某」云々。近體亦佳、記其一聯云、「風雨十年留鐵甕、雲山千古話銅官。」有笏巖近藁、余及趙君味辛爲之序。

又引洪亮吉「北江詩話」云、屠州守紳詩如栽盆紅藥、蓄沼文魚。〔卷一、粵雅堂叢書本、盆作盤。〕

又引同上云、屠刺史紳、生平好色、正室至四五娶、妾媵仍不在此數。卒以此得暴疾、卒。余久之、哭以詩云、「間情究累韓光政、醇酒終傷魏信陵。」蓋傷之也。〔卷二〕

洪亮吉「檢得屠刺史紳所寄詩追輓」一首云、故紙重繙百感興、卅年前事杳難憑。閑情究累韓光政、醇酒先亡魏信陵。曾記竺中重九讌、未忘燕市上元燈。詩人循吏談何易、一著終當讓義仍。君生平慕湯義仍爲人、然作吏傷於酷、以此不及。粟香室叢書本『鄂亭詩話』附錄。　洪亮吉（一七四六―一八〇九）、字は君直、稚存、號は北江、更正居士、江蘇陽湖の人。經學者、歷史地理にも精しく、駢文の作家としても有名。乾隆帝實錄の草稿に對する不滿から時事を論じて激越、嘉慶帝の忌諱に觸れ伊犂に流されたが、後恩赦に遇い歸京、著述に專念。著作に『洪北江全集』があり、『國朝先正事略』三十五、『淸史稿』三五六などに傳がある。

汪泉「鄂亭詩話題詞」云、乾嘉間、江陰屠笏巖刺史譔鄂亭詩話。今年在生運同刻之粟香室叢書中、持以示余。書凡三十六條、皆寓言儲說之流、而名以詩蒼、殆不可解。各條雖分署作者姓名、詞氣則如出一手。貌淵奧而實平易、與笏巖他所箸作頗復相類。昔人疑篋中集詩皆出次山、余於此書亦不能無疑也。然筆致通暢可喜。孤行則傳否不可知、入之叢書則廣筵。方丈忽見江珧、不能不謂爲珍味。運同於鄉先進著述力爲表章、固笏巖身後之知己哉。光緒己丑立秋日、越

人汪泉識。粟香室叢書本　汪泉（一八二八―一八九一）「泉字玉泉、一字芙生、號穀庵、又號無聞子、原籍浙江山陰、客粵占籍、遂爲番禺人。監生。光緒初劉坤一延主洋務、辦理中外交涉、居幕府十年。十七年卒、年六十四。陳寶咸爲撰「墓誌」。光緒十年刻『隨山館全集』、有詩文詞、尺牘、筆記、凡三十二卷、文廷式爲之序。……」（袁行雲『清人詩集敍錄』文化藝術出版社二六一九頁）

7以排偶之文試爲小說者、以至而亦遜其生動也　二四七―一〇

『史略』各版間の異同　「『光緒嘉興府志』五十二」の「二」、『大略』鉛印本及び初版は「三」とするが、合訂再版で「二」に訂された。『小說舊聞鈔』の方はそのまま「五十三」とされて訂正されていない。「第行于稗乘」の「行」字、『大略』鉛印本および初版では「託」に作る。他に句讀が三個所違うのみで、讀解にはさほど關わらない。『小說舊聞鈔』『燕山外史』引『光緒嘉興府志』五十三云、陳球字蘊齋、諸生。家貧、以賣畫自給。工駢儷、喜傳奇、嘘取明憑祭酒夢楨如賓生事、演成『燕山外史』、事屬野稗、才華淹博。「墨香居畫識」稱其善山水。（新纂）又同八十二『經籍志』子部小說家云、陳球、『燕山外史』八卷。

一簣山樵「燕山外史凡例」云、

一史體從無以四六成文、自我作古、極知僭妄無所逃罪、第託於稗乘常希末減。

一謹案　正史及有明甲榜全錄、俱賓無繩祖之名。其人殊不可考、余偶從坐客中間談、有客言之甚悉、幷出馮祭酒夢楨所撰賓生傳見示。余取傳中、節略敷衍成文、聊資談助。至於事之有無、與傳之眞贋、則非余之所敢知也。

一是作共三萬一千餘言、本是長篇駢儷文字、不分卷數。閱者苦其冗長、目力不繼、因是分爲八卷、聊徇閱者之意、強爲割裂、實非余之本意也。

一球在總角時、卽喜讀六朝諸體、稍長於國朝諸四六家尤所研究、鄙作間有活剝舊句、非敢有意剽竊、實因語在口頭、信手拈用耳。　一簣山樵識　文求堂本

趙氏『中國小說史略傍證』一二五頁云、清于原（辛伯）

『鐙窗瑣話』（道光丁未年刻本）云、「陳蘊齋先生球、居郡中瓶山之側、自號一簣山樵。性豪邁、耽酒、工畫。嘗寓西湖、遇雨則著屐出游、徘徊山麓間、終日不去。人笑其癡。蘊齋曰、〝此卽天然畫作也、勉向古紙堆中覓生活耳。〟詩篇淡逸如其畫。」引見陳汝衡『說苑珍聞』（一九八一年上海古籍出版社）。

『師弟答問集』九二頁云、〔增田問曰、〕312頁9行　姑勿論六朝儷語、卽較之張鷟之作、雖無其俳諧、而亦遜生動也。俳諧ノ有ル方ハ『燕山外史』デ生動ノ多イ方ハ『遊仙窟』ナリトノ意カ？

〔魯迅答曰、〕『燕山外史』ハ俳諧ト生動兩方トモ『遊仙窟』ニ及バナイコトデス、六朝儷語（トノ比較ハ）暫ク言ハナイデ（無論及バナイノ意ヲフクンデ居ル）。張鷟ノ作ニクラベテモアノ様ニ俳諧デハナイケレドモ而シテソノ生動ニモ劣ツテ居ル。

「『遊仙窟』序言」の最後で、「前于陳球之『燕山外史』者千載」という。參看第八編5所引「『遊仙窟』序言」。

吳展成「燕山外史序」云、昔湯義仍先生云、情之所至、可以死可以生、生者可以死、死者可以生、亘古迄今、蟠天際地、凡忠孝節義、聖賢仙佛、要皆一情之證果而已。奚獨男女之悲歡離合哉。唯是造化小兒往往幻成狡獪、而男女之悲歡離合、尤多不可思議之巧。于是供人世之文人墨士、興感淋漓、垂諸不朽、一重公案、遂爲千古情場矣。燕山外史一編、陳君蘊齋所作也。其間敍寶生愛姑事、栩栩欲活、悉以駢儷之詞寫之、流連宛轉、自成文章、殆有得之興觀羣怨之微旨歟。其事甚巧、固足以傳、而行文組織之工、戛戛乎與造化爭奇鬥勝。雖欲不傳不可得也。憶曩時曾讀孔東塘桃花扇序、歎其隱括全文之妙。今以此編較之、則如臚列大烹、而彼乃不過一臠之味耳。自來稗史中、求其善言情者、指難一二屈。蘊齋天才豪放、別開生面於一氣寡中、廻環起伏、虛實相生、稗史家無此才力、駢儷家無此結構、洵千古言情之傑作也。蘊齋介其小玩畦春示余、且囑余弁言其首。噫余本恨人、感茲棖觸、自何能已於言耶。聞之太上忘情、其次不及情、情之所鍾、正在吾輩。則是編也、陳君作之、余也讀之、唯有相視莫逆已耳。夫何言哉。夫何言哉。試擧以質之畦春、當亦必曰如是如是。　嘉慶辛未仲冬古横塘螟巢居

士吳展成拜手題。　文求堂本

呂清泰「燕山外史序」云、三界無安、熱如火宅、六根未淨、織就情絲、一經縛着、盡成魔障、我佛以諸法空相、度一切苦厄、乃太上忘情本旨。　蘊齋先生所著燕山外史、傳竇生逸事、始由鍾情、繼至割情、終於忘情。其間悲歡離合、嬉笑怒罵、又將世情之炎涼富貴、都收入阿羅漢布袋中、是空是色、參透眞諦。憶己未之秋、　蘊齋索余題詞、甫讀一遍、第如入莊嚴法會、琉璃璉烱、纓絡珠寶、光怪陸離、又如金鐘玉磬、青鸞玄鶴、宣演法音。但以語言文字、而猶着色相也。迄今觀之、乃是大辨才登七寶蓮座、講說大乘妙偈、示現前業鏡、當頭棒喝、喚醒世間癡兒獃女、同歸正覺、成不可思議功德、普願讀燕山外史者、不作情詞艷史觀。　嘉慶辛未涂月上浣辟支頭陀呂清泰鐵崖氏拜手。　文求堂本

馮夢楨「竇生本傳」云、永樂時、有竇生者、名繩祖、字繼芬。先世燕山人。宋南渡時有罷官於浙西者。因卜宅於當湖。父某以賈起家、富甲鄉里。生幼失恃、無兄弟。稍長、儀質秀穎、弱冠補弟子員、就傅禾城。禾中人驚傳、以爲衛玠至矣。生性和易、凡詩壇酒社、生不至、合座不歡。一日春游遇雨、趨避簷下、有老媼款招入室。詢爲李姓嫠婦、無食無兒。有女名愛姑、年十五、殊色也。一見心醉、因厚餽求通。媼心許、而姑不苟從也。生積思成夢、積夢成疾。有知其隱者、僞託能爲崑崙事、醉生以酒、潛以村妓薦寢。生察知、恚盡、病轉劇。姑聞而私惜、不能遣情。其母又嗟貧歎老。日夕慫恿、遂委身焉。生乃拓室居之、顏曰、春草吟廬、繾綣良久。父偵知所爲、怒而逐歸。先是父商於山左、與淄水宦某聯姻、至是命生就婚。而姑之門、杳隔雲山、幽思鬱鬱、向之所以病生者、今轉而病姑矣。時有金陵鹺商、聞其美、具千金餌媼。媼本婦中跖徒、受商指使、紿以生書來迓促姑就道。及至廣陵、始知墮計、號痛曰、共伯云亡、柏舟矢志、矧竇郎尚存乎。遽觸石覓死、血流被面、商懼而遣出。母女出門、惘惘莫適。秦淮素稱藏嬌地、青樓之鴇遇之、以爲奇貨可居也、誘致之。姑時進退維谷、幷因母病瀕死。權爲棲托、母沒毀容勵志、咸不敢犯。生入贅後、素性瀟灑、雖受勢家拘束、託赴秋闈、辭歸。風阻金陵、有友馬遴者、黃衫客流也。向在禾中訂交、旗亭邂逅、信步平康、瞥見姑狀、怪而驚詢、備述顚末、生欲攜歸。馬子以爲歸告而娶、且留

敝廬以待君、生允之。南歸未久、遭父喪、訃於馬子、馬子來弔、而不偕姑至、生亦會意、及服闋、將遣伻迎歸。大婦與小妻、伻方行。而婦翁之書適至、迫招生往。生不獲已、乃託其家計於族昆、促裝以行、紓路經馬子之居、取姑同赴婦家、馬子力阻之、不聽。甫入謁、而河之獅大吼、幽姑別室、倍極挫辱。生不敢庇、始信馬子先見、而嗟何及矣。會中秋、舉室酣飲、生託疾不赴、俟衆醉、契姑宵遁、値妖婦唐塞兒作亂。復倉皇相失、姑就尼庵匿跡。生阻兵火、復回婦家、其婦翁素爲勢惡、衆皆欲得甘心、乘亂肆掠、全家已遭劫火。其婦竄入丐婦中獲免、遇諸塗、携歸故里。比反積貲爲族昆消耗、賸有薄產、度支易竭。婦本驕淫、厭貧求去、旋有醜行、生不欲爲朱翁子而不能也。斯時罠罠孑立、弔影淒涼、居無何而愛姑忽乘扁舟至、蓋自寄跡尼庵時、有孀婦者、本杭人女、投庵守志、與姑相契。爰約伴同歸、姑既至悲喜交集、生患無以爲家。姑曰、君不有春草吟廬在乎。遂偕居之。鳴機佐讀、生得銳志功名。計圖北上、乃割宅出售隣家。携資至邗溝、又遭胠篋、窮途潦倒、而馬子若逆知也者、使人賚金贈之。是年遂得坐監、秋榜春闈、俱獲雋職、授刑曹、治獄多平反、遷山東巡按、頗振官聲、迎姑至署、儼同命婦矣。一日生建佛會於緇林中、見馬子在焉。驚喜邀入幕、詰其爲僧之故、馬因具述爲人復仇、亡命江湖、避仇於此。且言君與姑、跋涉間的、驟離驟合、雖是天緣、然無媒作合、有傷風雅。今以和尚爲媒可否。生欣從、將舊作新、重整花燭、吏民者觀、無不嘖嘖歎羨。未幾姑擧一男、覓僱乳哺。或率一婦至、視之卽前出婦也。詢知夫死子殤、貧充賤役。生與姑雖深鄙之、而復優容之、分居別墅、豐給衣食、待以客禮。久之婦復媒蘖與廝役通、畏馬之燭姦也、先發制人、將以壁藏事中傷之。婢洩其謀、馬刃婦亡去。爲當事所彈、生因被逮、既而久驗無跡、得復官。移理鹽漕、忤權貴、一麾出守。當馬子之臨去也、貽緘在几、備言前因後果、屬以修眞返本之道。生卽解組歸隱、夫婦共得稚川之術、後皆尸解、悉如馬子所言。馬子破家亡命、後其子漂泊無歸。生訪得之、養爲己子、及其成立、以家貲折半予之。人以是更多生、於友誼爲不負所報。其後裔克纘家聲、至今爲著姓云。　文求堂本

8 仍錄其敍寶生爲父促歸、以至然于本文反有删削　二四八十一〇

『史略』各版間の異同　「放苴之豚」の「苴」字、『大略』鉛印本から七十三年版全集まですべて「笠」に作るが、新版全集で「苴」に正す。「終無出柙之時」の「終」字、三十八年版全集から七十三年版全集まで何故か「似」に作る。また「徒栽侍女之花」の「侍」字、『大略』鉛印本、初版は原文に從い「待」字に作るが、合訂再版で誤り、新版全集でも訂正されていない。增田涉宛書簡（後出）に見えるように改めねばならない。

『燕山外史』の版本　『史略』成稿までに日本翻刻の三種（無注・有注）を含めて十七・八種ある。原刊は嘉慶十六年序三陋居藏版八卷本（人文研藏本、吳展成・呂淸泰の兩序、十六氏の題詞、著者の例言）かと思われる。無注本には二卷本もある。傅聲谷の注釋本は光緒五年上海申昌書局石印本、又同年上海廣益書局石印本などが最初である。近刊に春風文藝出版社校點本（『孤山再夢』と合刊。雲南人民出版社『中國歷代小說辭典』第三卷五七四頁）というが未見。『史略』の記述からすれば、魯迅は八卷無注本、傅聲谷の注釋本の兩方を見ていたことは確かだが、兩種とも如何なるテキストによったのかは、日記・藏書目錄等に何の記錄もないので未詳。

いま引用部分を無注本は三陋居藏版本、嘉慶十六年序刊二卷本（國會藏本・呂淸泰の序しかない）の二本、傅聲谷注釋本は文求堂本（明治三十七年鉛印本）に據って校對する。

「還恐猿心易動」の「猿」字、三本ともに「猴」に作る。「寄情豆蔻梢頭」の「豆」字、文求堂本は「荳」字に作る。「漫漫似雪」の「似」字、三本ともに「作」に作る。「剖破樓頭菱影」の「菱影」二字、三陋居藏版本・國會本は「蔆影」に作り、文求堂本は「蔆影」に作る。以上、この三本は魯迅目睹のうちに入らぬだろう。

『師弟答問集』九二頁云、〔增田問曰、〕313頁6行　侍女花（？）　日本ノ翻刻燕山外史ニハ待女花トシテ蘭花ト注ス、如何？〔魯迅答曰、〕「侍」ハ誤植、女ガ植ルト香ガ一層ヨイト云フ傳說カラ來タ名デショウ。女ヲ待ツ花。シテ見レバ蘭モ頗ル不屈キナ花ダ。

三陋居藏版本、國會本ともに「待女花」の下に「蘭名待女」という原注がある。

傅聲谷「燕山外史註釋凡例」云、

一是編素無註釋。妨間以桃花扇後序之註欣動予意。予不揣尠見、妄爲輯註、內有昧其緣起或根據、晩出之書、有徵引紕繆、或非運用之本意者、亦所不免。至所集唐宋元明之詩句、有五言單對及七言單對、各段中甚夥。予之註亦僅得十之三四耳。惟願　博雅君子惠而敎我。

一竇生在幽歡中一段、詞頗淫褻、有援黃山谷綺語之說、囑山樵删之。山樵因虛境實做似得文家空中架疊法、不能割愛。奈人之目爲淫書者、多緣此一段媟嬻之詞、以滋訾議。予故略爲删節以免口實。

一是編原有諸名人題詠長短詩詞凡三十餘首。體例各備、篇篇皆成珠玉、第憾限於刻資、未獲登諸棗梨以復舊觀也。閱者諒之。

一是編於既梓後、間復有得、卽補於本卷之尾。或誤註者、亦隨時訂正、以附於後。

一是註幸賴諸同人樂爲佽助、集腋成裘。但以是編見愛於同學諸公、慫恿附梓、遂勉應之。　東甌若騃子識　文求堂本

項震新「燕山外史註釋跋」云、余友聲谷傅君、嘗設帳樂成。樂成陳君璞生、厘石兩昆仲甚推重之。同治庚午歲、館于徐氏內弟衡生家、近又館于內兄蓉山家、與予館僅隔數武、時通款曲。歷經多載、過從者數矣。稔知歲入館穀、購置書籍。有未及購者、寄意一瓻不憚煩。所注燕山外史、駢體八卷、文段詮解、纖悉無遺、將附梓屬予校讎。予披覽一過、愛其左宜右有、謂讀是編、了然于心目間也。且篋中更有石箋袁文補正及別著數種、擬後續刻、需其竣當窺全豹。特先就此册爲之校勘。爰書數語以之歸。　文求堂本

「註釋凡例」に「東甌の若騃子」と署するのは傅聲谷の別號である。永嘉一帶の古稱は「東甌」。

戴咸弼「燕山外史註釋序」云、永嘉傅君聲谷、郡痒明經也。性情敦樸、有古君子風。其嗜古若飢渴、家貧老於筆耕。近時師道廢、惟善誘後進者咸推君。郡邑士人爭延致其家爲名師焉。至則輒發其所藏書盡讀之。昕夕采緝不倦、久而所見廣、所得益多。尤喜駢四儷六之文、摘取袁文石箋之闕誤者

甚夥、爲之補正。又注燕山外史八卷、皆援據該博、攷覈精審、其勤蓋不可及。夫士之入金門、狃玉堂、負大雅閎達之望、於以潤色鴻業、校理祕文、其遠過於君者、豈非以其遇哉。而遇不遇、則固有命存焉爾。若既窘於遇不獲、進而與賢士大夫上下其議論、退而以古人之文章澆胸中之壘塊、不亦重可慨哉。余讀君自敘述一簣山樵著書之旨、反覆辨論、以爲有所規諷而作、其信然耶。抑山樵不自爲之注、而君獨肆力於是書、引伸觸類以證明之、豈亦有所感發而云然耶。惜補正一編、無將伯之助、未梓藏于家。今外史注、剞劂將竣、出以示余、乞一言弁諸簡首。昔左太冲作三都賦、假皇甫士安序、取重當時。謭陋如余、何足以重君。然苦岑之契、誼不敢辭。爲述其梗概如此、未知有當作者之意否。　光緒己卯中冬嘉善戴咸弼拜撰。　文求堂本　光緒己卯は光緒五年、西紀一八七九年。

9 雍乾以來、以至則博識多通又害之　二四九－四

『史略』各版間の異同　「若藝術之微」の「藝」字、初版のみ「惟」に誤る。「直隸大興人」の「直隸」二字、『大略』鉛印本、初版は「京兆」に作るが、合訂再版で「直隸」に訂さる。

胡適「鏡花緣的引論」二、李汝珍云、『鏡花緣』刻本有海州許喬林石華的序、序中說「『鏡花緣』一書、迺北平李子松石以十數年之力成之。」其餘各序及題詞中、也都說是李松石所作。但很少人能說李松石是誰的。前幾年、錢玄同先生告訴我李松石是一個音韻學家、名叫李汝珍、是京兆大興縣人、著有一部『李氏音鑒』。後來我依他的指示、尋得了『李氏音鑒』、在那部書的本文和序裏、鉤出了一些事蹟。

李汝珍、字松石、大興人。『順天府志』的選舉表裏、舉人進士隊裏都沒有他、可見他大概是一個秀才、科舉上不曾得志。『順天府志』的藝文志裏沒有他的著作、人物志裏也沒有他的傳。『中國人名大辭典』（頁三八九）有下列的小傳。

李汝珍【清】大興人、字松石。通聲韻之學、撰『李氏音鑒』、定「春滿堯天」等三十三字母。徵引浩繁、淺學者多爲所震、然實未窺等韻門徑。又有『鏡花緣』、及李刻『受子譜』。

此傳不知本於何書、但這種嚴酷的批評實在只足以表示批評者自身的武斷。（關於李汝珍在音韻學上的成績、詳見下文。）

乾隆四十七年壬寅（一七八二）、李汝珍的哥哥汝璜（字佛雲）到江蘇海州做官、他跟到任所。那時歙縣凌廷堪（生一七五七、死一八〇九）家在海州、李汝珍從他受業。論文之暇、兼及音韻。（『音鑒』五、頁十九）那時凌廷堪年僅二十六歲。以此推之、可知李汝珍那時也不過二十歲上下、他生年約當乾隆二十八年（一七六三）。凌廷堪是『燕樂考原』的作者、精通樂理、旁通音韻、故李汝珍自說「受益極多」。

自乾隆四十七年至嘉慶十年（一七八二—一八〇五）、凡二十三年、李汝珍只在江蘇省內、或在淮北、或在淮南（『音鑒』石文曝序）。他雖是北京人、而受江南北的學者的影響最大。他的韻學能辨析南北方音之分、也全靠這長期的居住南方。嘉慶十年石文曝序中說「今松石行將官中州矣。」但嘉慶十九年（一八一四）他仍在東海（『音鑒』題詞跋）似乎他不曾到河南做官。

乾隆五十八年（一七九三）、凌廷堪補殿試後、自請改教職、選寧國府教授、六十年（一七九五）赴任。此後、李汝珍便因道路遠隔、不常通問了。（『音鑒』五、頁十九）他的朋友同他往來切磋的、有

許喬林、字石華、海州人。

許桂林、字月南、海州人、嘉慶舉人。於諸經皆有發明、通古音、兼精算學。著有『許氏說音』、『音鵠』、『宣夜通』、『味無味齋集』（『人名大辭典』頁一〇三四）

許桂林是李汝珍的內弟（『音鑒』五、頁十九）。

徐銓、字藕船、順天人。著有『音繩』（『音鑒』書目）。

徐鑑、字香垞、順天人。著有『韻略補遺』（同上）

吳振勃、字容如、海州人。

洪□□、字靜節。

這一班人都是精通韻學的人。『華嚴字母譜』列聲母四十二、韻母十三。李汝珍把聲母四十二之中、刪去與今音異者十九個、而添上未備的及南音聲母十個、共存三十三個聲母。他又把韻母十三之中、刪去與今音異者兩個、而添上今音十一個、共存韻母二十二個。他自己說、新添的十一個韻母之中、一個（麻韻）是凌廷堪添的、徐鑑與許桂林各添了兩個、徐

銓添了一個、他自己添的只有五個（『音鑒』五、頁十九）。

嘉慶十年（一八〇五）、『音鑒』成書（『音鑒』李汝璜序）。

嘉慶十五年（一八一〇）、『音鑒』附刻、是年刻成（吳振勳後序）。

嘉慶十九年（一八一四）、李汝珍在東海、與許桂林同讀山陰俞杏林的『傳聲正宗』。

俞氏書中附有『音鑒』題詞四首、其第四首云、

松石全書絕等倫、月南後序更精醇。　拊膺我媿無他技、開卷差爲識字人。

此可見『音鑒』出版不久、已受讀者的推重。

嘉慶二十一年（一八一六）、他把俞杏林的題詞附刻在『音鑒』之後、並作一跋。自此年以後、他的事蹟便無可考了。

自乾隆四十七年至此年、凡三十五年、他大概已是五十五歲左右的人了。這三十五年中、他的踪跡似乎全在大江南北。他娶的夫人是海州人、或者他竟在海州住家了。

『鏡花緣』之著作、不知在於何年。孫吉昌的題詞說：

……咄咄北平子、文采何陸離！……而乃不得意、形骸將就衰、耕無負郭田、老大仍驅飢。可憐十數載、筆硯空相隨、頻年甘兀兀、終日惟孳孳。心血用幾竭、此身忘困疲。聊以耗壯心、休言作者癡。窮愁始著書、其志良足悲。……古今小說家、應無過於斯。……傳鈔紙已貴、今已付剞劂、不脛且萬里、堪作稗官師。從此堪自慰、已爲世所推。……

從這上面、我們可得兩點：

（一）『鏡花緣』是李汝珍晚年不得志時作的。

（二）『鏡花緣』刻成時、李汝珍還活着。

最可惜的是此詩和許喬林的序都沒有年月可考。但坊刻本有道光九年（一八二九）麥大鵬序、他說：

李子松石『鏡花緣』一書、耳其盡善、三載於茲矣。戊子（道光八年、一八二八）清和、偶過張子鈔亭書塾、得窺全豹、不勝舞蹈。復聞芥子園新雕告竣、遂購一函、如獲異寶。……

麥氏在一八二九、已知道此書三年了。一八二八他所見的『全豹』、不知是否刻本。但同年已有芥子園新雕本。次年麥氏又託謝葉梅摸繪一百八人之像、似另有繪像精雕本、爲

後來王韜序本的底本。我們暫時假定一八二八年的芥子園本爲初刻本、而麥氏前三年聞名的『鏡花緣』爲鈔本。如此、我們可以說：

一八〇五、『音鑒』成書。

一八一〇、『音鑒』刻成（以上均考見上文）。

約一八一〇—一八二五、—「十數載之力」—爲『鏡花緣』著作的時期。

約一八二五、『鏡花緣』成書。

一八二八、芥子園雕本『鏡花緣』刻成。

一八二九、麥刻謝像本（廣東本）附刻。

假定芥子園本卽孫吉昌題詞裏說的「今已付剞劂」之本、那麼、李汝珍還不曾死、但已是很老的人了。依前面的推算、他的生年大約在乾隆中葉（約一七六三）。他死時約當道光十年（約一八三〇）、已近七十歲了。

又三、李汝珍的人品云、我們現在要知道李汝珍是怎樣的一個人。關於這一點、『音鑒』的幾篇序很可以給我們許多材料。余集說：

大興李子松石、小而穎異、讀書不屑屑章句帖括之學、以其暇旁及雜流、如壬遁、星卜、象緯、篆隸之類、靡不日涉以博其趣。而於音韻之學、尤能窮源索隱、心領神悟。

石文曝說：

松石先生忼爽遇物、肝膽照人。平生工篆隸、獵圖史、旁及星卜弈戲諸事、靡不觸手成趣。花間月下、對酒徵歌、興至則一飲百觥、揮霍如志。

這兩個同時人的見證、都能寫出『鏡花緣』的作者的多才多藝。許喬林在「鏡花緣序」裏說此書「枕經胙史、子秀集華、兼貫九流、旁涉百戲、聰明絕世、異境天開。」我們看了余集石文曝的話、然後可以了解『鏡花緣』裏論卜（六十五回又七十五回）、談弈（七十三回）、論琴（同）、論馬弔（同）、論雙陸（七十四回）、論籌算（同）以及種種燈謎、和那些雙聲疊韻的酒令、都只是這位多才多藝的名士的隨筆遊戲。我們現在讀這些東西、往往嫌他「掉書袋」。但我們應該記得這部書是清朝中葉的出產品。那個時代是一個博學的時代、故那時代的小說也不知不覺的掛上了博學的牌子。這是時代的影響、誰也逃不過的。　亞東本『鏡花緣』

余集の序は「嘉慶十年九月」、石文曝のは「嘉慶十年歲在乙丑、長至前十日」の日付を持つ。

許喬林「鏡花緣序」云、班志稱、小說家者出於稗官、如淳注謂、王者欲知閭巷風俗、立稗官、使稱說之、此古義也。乃坊肆所行雜書、妄題爲第幾才子、其所描寫、不過渾敦窮奇面目、卽或闡揚盛節、點綴閒情、又類土飯塵羹、味同嚼蠟。余嘗目爲不才子、似非過論。昔王臨川答曾南豐書謂、小說無所不讀、然後能知大體、而續文獻通考經籍一門、亦采及琵琶荆釵、豈非以其言孝言忠、宜風宜雅、正人心、厚風俗、合於古者稗官之義哉。鏡花緣一書、迺北平李氏松石、以數年之力成之、觀者咸謂有益風化。惜向無鐫本、傳鈔既久、魯魚滋甚、近有同志輯而付之梨棗。是書無一字拾他人牙慧、無一處落前人窠臼、枕經嘔史、子秀集華、兼貫九流、旁涉百戲、聰明絕世、異境天開、卽飲程鄉千里之酒。而手此一編、定能驅遣睡魔、雖包孝肅笑比河淸、讀之必當噴飯。綜其體要、語近滑稽、而意主勸善、且津逮淵富、足裨見聞。昔人稱、其正不入腐、奇不入幻。另具一副手眼、另出一種筆墨、爲虞初九百獨開生面、雅俗共賞之作。知言哉。輒述此語以質之天下眞才子喜讀是書者。海州許喬林石華撰。

光緒三年刊本

洪棣元「鏡花緣序」云、凡人胸中無物、必不能立說著書、目中有物、又必至拘文牽義。此作家之所以難也。從古說部無慮數千百種、非失之虛無入幻、卽失之奧折難明。非失之孤陋寡聞、卽失之膚庸迂闊。令人不耐尋味、一覽無餘、夫豈無愜心貴當卓然名世者。總未有如此書之一讀一快、百讀不厭也。觀夫繁稱博引、包括靡遺、自始至終、新奇獨造、其義顯、其辭文、其言近、其旨遠。後生小子、頓敎啓發心思、博彥鴻儒、藉得博資採訪、匪持此也。正人心、端風化、是尤作者之深意存焉。不知者、僅以說部目之、知之者、直以經義讀之。蓋溫柔敦厚、詩之敎。疎通知遠、書之敎。廣博易良、樂之敎。潔靜精微、易之敎。恭儉莊敬、禮之敎。比事屬辭、春秋之敎。是書兼而有之。非胸中有物、而目中無物者、詎能若是乎。論者嘗謂、宋書固屬精詳、而擅造奇詭。晉書雖爲駢儷、而叢冗特甚。必於是書斯能無憾。豈可以稗官野史而忽之哉。武林洪棣元靜荷識。　光緒三年刊本

胡適「鏡花緣的引論」二、李汝珍的音韻學云、關於李汝珍的

『音鑒』我們不能詳細討論、只能提出一些和『鏡花緣』有關係的事實。『鏡花緣』第三十一回、唐敖等在歧舌國、費了多少工夫、才得着一紙字母、共三十三行、每行二十二字、只有第一個字是有字的、或用反切代字。其餘只有二十一個白圈。只有「張」字一行之下是有字的。每行的第一個字代表聲類（Consonants）、每行直下的二十二音代表韻部（Vowels）。這三十三個聲母、二十二個韻母、是李汝珍的『音鑒』的要點。（中略）

在我們這個時候、有種種音標可用、有語音學可參攷、所以我們回看李汝珍最得意的這點發明、自然覺得很不希奇了。但平心而論、他的音韻學却也有他的獨到之處。他生於清代音韻學最發達的時代。但當時的音韻學偏於考證古韻的沿革、而忽略了近音的分類。北方的音韻學者、自從元朝周德清的『中原音韻』以來、中間如呂坤劉繼莊等、都是注重今音而不拘泥於古反切的。李汝珍雖頗受南方音韻學家的影響、但他究竟還保存了北方音韻學的遺風、所以他的特別長處是（一）注重實用、（二）注重今音、（三）敢於變古。他在「凡例」裏說：「是編所撰字母、期於切音易得其響、故粗細各歸一母。」他以實用爲主、故「非、敷、奉」併入「粉」、只留f音、而大膽的删去了國音所無的v音。故「泥、娘」併入「鳥」、另分出一個「嫩」、兩母都屬n音、而那官音久不存在的ng與gn兩音就被删去了。這種地方可以見他的眼光比近年製造注音字母的先生們還要高明一點。（後略）　亞東本『鏡花緣』

『師弟答問集』八六頁云、〔增田問曰、〕314頁6行　壬遁。象緯。　〔魯迅答曰、壬遁〕「六壬」ト云フト術ニヨッテ未來（吉凶）ヲ知ル方法、〔象緯〕星象及ビ「緯書」（漢代人ノ造ッタ僞書）ニヨッテ未來ノ大事ヲ知ル學問。

周作人「鏡花緣」（『自己的園地』）云、我的祖父是光緒初年的翰林、在二十年前已經故去了、他不曾聽到國語文學這些名稱、但是他的教育法却很特別。他當然仍教子弟學做時文、唯第一步的方法是教人自由讀書、尤其是奬勵讀小說、以爲最能使人「通」、等到通了之後、再弄別的東西便無所不可了。他所保學的小說、是西遊記鏡花緣儒林外史這幾種、這也就是我最初所讀的書。（以前也曾念過「四子全書」、不過那只是「念」罷了。）

我幼年時候所最喜歡的是「鏡花緣」。林之洋的冒險、大家都是賞識的、但是我所愛的是多九公、因爲他能識得一切的奇事和異物。對於神異故事之原始的要求、長在的血脈裡、所以山海經十洲記博物志之類千餘年前的著作、在現代人的心理仍有一種新鮮的引力：九頭的鳥、一足的牛、實在是荒唐無稽的話、但又是怎樣的愉快呵。「鏡花緣」中飄海的一部分、就是這些分子的近代化、我想凡是能□理解荷馬史詩「阿迭綏亞」的趣味的、當能賞識這荒唐的故事。

有人要說、這些荒唐的話卽是誑話。我當然承認。但我要說明、以詐欺的目的而爲不實之陳述者才算是可責、單純的——爲說誑而說的誑話、至少在藝術上面、沒有是非之可言。向來大家都說小孩喜說誑話、是作賊的始基、現代的研究才知道並不如此。小孩的大都是空想的表現、可以說是藝術的創造；他說我今天看見一條有角的紅蛇、決不是想因此行詐得什麼利益、實在只是創作力的活動、用了平常的材料、組成特異的事物、以自娛樂。敍述自己想像的產物、與敍述現世的實生活是同一的眞實、因爲經驗並不限於官能的一方面。我們用小孩誠實、但這當推廣到使他並誠實於自己的空想。誑話的壞處在於欺蒙他人；單純的誑話則只是欺蒙自己、他人也可以被其欺蒙——不過被欺蒙到夢幻的美裡去、這當然不能算是什麼壞處了。（中略）

夢想是永遠不死的。在戀愛中的青年與在黃昏下的老人都有他的夢想、雖然伊們的顏色不同。人之子有時或者要反叛伊、但終究還回到伊的懷中來。我們讀王爾德的童話、賞識他種種好處、但是「幸福的王子」和「漁夫與其魂」裡的敍述異景總要算是最美之一了。我對於「鏡花緣」、因此很愛他那飄洋的記述。我也愛「獃子伊凡」或「麥加爾的夢」、然而我或者更幼稚的愛希臘神話。

記得「聊齋志異」卷頭有一句詩道、「姑妄言之姑聽之」、這是極妙的話。西遊記封神傳以及別的荒唐的話（無聊的模擬除外）、在這一點上自有特別的趣味、不過這也是對於所謂受戒者（The Initiated）而言、不是一般的說法、更非所論於那些心思已入了牛角灣的人們。他們非用紀限儀顯微鏡來測看藝術、便對著畫鍾馗供香華燈燭；在他們看來、則

「鏡花緣」若不是可惡的妄語必是一部信史了。

この文章は一九二三年三月三十一日の『晨報副刊』に載っ

たもので後『自己的園地』（初版の晨報叢書版また北新書局版にも）に收められた。當然魯迅も讀んでいるはずである。魯迅自身は直接少年時代の讀書としてこの書に言及しないが、この文章からすると彼らは子どものころから『西遊記』や『儒林外史』とともにこの書に親しんでいたことになる。また「誑話」を藝術の創造だとする部分など、本篇12に引く例文などと呼應して兄弟共通の認識だったと思われる。

10『鏡花緣』凡一百回、以至然竟未作　二四九－五

『史略』各版間の異同　『大略』鉛印本及び初版は「旋復以文字結嫌、弄風驚其坐衆。魁星則現形助諸女、麻姑亦化爲道姑、來和解之、于是卽席誦詩」の三十八文字を最後の一句「卽席成詩」の四字に作る。『大略』鉛印本は「宴」を異體の「醼」に作り、三十八年版全集は「紅文宴」の「紅」字を「弘」字に作る。

『鏡花緣』の版本　嘉慶二十三年蘇州原刻本と稱せられるものから始まって數多い。『魯迅藏書目錄』は、前項の「新標點本」卽ち民國十二年上海亞東圖書館版と共にもう一部光緒三年刊本を著錄する。

鏡花緣二十卷一百回　清李汝珍著　光緒三年（一八七七）刻本二十册

鏡花緣　清李汝珍著　汪原放・章希呂句讀　章希呂・餘昌之校對　一九二三年上海亞東圖書館初版四册

『史略』の引用はこの二本に據ったと思われる。引用文の校對には、魯迅舊藏と同じ本だと考えられる光緒三年刊京大文學部藏本と亞東版を用い、それに近刊の上海古籍出版社排印本（一九九〇）をも加えた。稍や出入りはあるが引用文は亞東版に最も近い。此節の引用第四十八回は三本にすべて一致していて異同はない。

11作者命名之由、以至（第十一回『觀雅化閑游君子邦』）　二五〇－二

異同は胡適の「引論」をひいて「詳見本書『引論』四」とする「四」を、『大略』鉛印本・初版が「第四節」とする以外に、『大略』鉛印本が引用文の末尾の「廣廣見識」を

正しく「廣廣識見」とする部分のみである。

胡適「鏡花緣的引論」四、鏡花緣是一部討論婦女問題的書云、現在我們要回到『鏡花緣』的本身了。

『鏡花緣』第四十九回、泣紅亭的碑記之後、有泣紅亭主人的總論一段、說：

以史幽探哀萃芳冠首者、蓋主人自言窮探野史、嘗有所見、惜湮沒無聞、而哀羣芳之不傳、因筆志之。……結以花再芳畢全貞者、蓋以羣芳淪落、幾至澌滅無聞、今賴斯而得不朽、非若花之再芳乎？所列百人、莫非瓊林琪樹、合璧駢珠、故以全貞畢焉。

這是著者著書的宗旨。我們要問、著者自言「窮探野史、嘗有所見」、究竟他所見的是什麼？

我的答案是：李汝珍所見的是幾千年來忽略了的婦女問題。他是中國最早提出這個婦女問題的人、他的『鏡花緣』是一部討論婦女問題的小說。他對於這個問題的答案是、男女應該受平等的待遇、平等的教育、平等的選舉制度。

這是『鏡花緣』著作的宗旨。我是最痛恨穿鑿附會的人、但我研究『鏡花緣』的結果、不能不下這樣的一個結論。

（後略）亞東本

致增田涉書信320522云、鏡花緣四本　第二十二、二十三及三十三回は支那には可笑しいとされて居ますが併日本では習慣が違ふからどーでしょー。　このとき増田に贈ったのは亞東本だと思われる。關西大學の『増田涉文庫目錄』には「鏡花緣一百回　清李汝珍撰　民國二十一年上海亞東圖書館排印本四（冊）」とある。

「隨感錄五十七　現在的屠殺者」全集第一卷『熱風』云、高雅的人說、〃白話鄙俚淺陋、不値識者一哂之者也。〃

中國不識字的人、單會講話、〃鄙俚淺陋〃、不必說了。〃因爲自己不通、所以提倡白話、以自文其陋〃如我輩的人、正是〃鄙俚淺陋〃、也不在話下了。最可嘆的是幾位雅人、也還不能如『鏡花緣』裏說的君子國的酒保一般、滿口〃酒要一壺乎、兩壺乎、菜要一碟乎、兩碟乎〃的終日高雅、却只能在呻吟古文時、顯出高古品格、一到講話、便依然是〃鄙俚淺陋〃的白話了。四萬萬中國人嘴裏發出來的聲音、竟至總共〃不値一哂〃、眞是可憐煞人。（後略）　全集注云、這裏所引酒保的話、見于該書第二十三回「說酸話酒保咬文」。〃君

子國〃應爲淑士國。

第十一回引用文　「只見一隷卒……」、三本共に「見」下に「有」字あり、脱誤か。「小弟實難遵命」の「遵」字、上海古藉版は「從」に作る。「這才交易而去」の「這」字、上海古籍版は「方」に作る。「廣廣見識」の「見識」二字、三本共に「識見」に作る。これは『大略』鉛印本に一致するから、初版からの顚倒として「識見」とすべきである。

12又其羅列古典才藝、以至（第九回）　二二五二十五

『史略』各版間の異同　「假林之洋之打諢」、『大略』鉛印本及び初版はこの句の冒頭に「故」字を着けるが、合訂再版以後すべて「故」字を削る。また改訂版から三十八年版全集までは地の文、引用文ともに「林之洋」を「林子洋」に作る。

胡適「鏡花緣的引論」三、李汝珍的人品（承受本篇**9**所引）云、關於時代的影響、我們在『鏡花緣』裏可以得着無數的證據。如唐敖多九公在黑齒國女學堂裏談經、論「鴻雁來賓」一句應從鄭玄注、『論語』宜用古本校勘、「車馬衣輕裘」一句駁朱熹讀衣字爲去聲之非、又論『易經』王弼注偏重義理、「既缺精詳、而又妄改古字。」這都是漢學時代的自然出產品。後來五十二回唐閨臣論注禮之家、以鄭玄注爲最善、也是這個道理。至於全書說的那些海外國名、一一都有來歷。那些異獸奇花仙草的名稱、也都各有所本（參看錢靜方『小說叢考』卷上、頁六八至七二。）這種博覽故書、而不很能評判古書之是否可信、也正是那個時代的特別現象。　亞東本『鏡花緣』

錢靜方『小說叢考』「鏡花緣考」云、此書爲北平李松石著、亦係盧陵復辟事、首卷卽從敬業起兵敍入、詳見綠牡丹考。以下海洋游覽、女界論文、則皆作書者藉以炫博之辭、無一非空中樓閣矣。

武后上苑催花事、見事物考原。言武后詔游后苑、百花俱開、惟牡丹獨遲。后怒、貶於洛陽、故洛陽之花冠天下。

上官婉兒、上官儀之女孫也。儀有罪死、婉兒沒入掖庭、辯慧善屬文、明習吏事、則天愛之、百司表奏、多令參決。見通鑑。又景龍文館記、唐上官昭容名婉兒、母鄭氏、方娠、夢神畀之大秤曰、「持此可秤量天下人才。」此書中有開女科

一節、卽由此語附會而出。與羣臣賦詩事、見全唐詩話。中宗正月晦日、幸昆明池、賦詩、羣臣應制百餘篇。命昭容登綵樓、選爲新繙御製曲。須臾、紙落如飛、惟沈佺期宋之問二詩不下。俄一紙飛墜、乃沈詩也。評曰、二詩工力悉敵、沈落句詞氣已竭、宋詩不愁名月盡、自有夜珠來、獨稱健擧。

當康見山海經。欽山有獸、狀如豚而有牙、名曰當康。其名自呼、則天下大穰。果然見夷堅續志、似猿而大、行則大者前、小者後、有爲射中者、則生者拔死者箭、自刺而死。藥獸見羅泌路史、神農時、白民國進藥獸、有疾病、撫其背而語之、獸如野外、銜一草歸、服之卽愈。故虞卿曰、「黃帝師藥獸而知醫。」

精衞見山海經、發鳩山有鳥、係炎帝少女名女娃、游東海、溺而不返、化爲鳥、名衞精、常銜西山之石、以堙東海。不孝鳥見東方朔神異經、身上有不孝不慈不道等字、誠如此書所云、但非雙頭耳。飛涎鳥見外荒記、南海狗國有鳥、吐涎如膠、繞樹飛灑、有他禽至、如入網然、乃啄食之。駝鳥見晉唐書、土火羅獻大鳥、高七尺、色黑、類橐駝、謂之駝鳥。人魚、異物記謂卽嬾婦魚之別名。按任昉述異記、嬾婦溺水死、化爲魚、其膏可燃燈、以照鳴琴博弈則明、照紡績則暗。唐敖謂大魚一日逢魚頭、七日逢魚尾、見元中記。飛魚見山海經、鰩魚狀如鯉、魚身鳥翼、以夜飛、音如鸞。又云、䰰山多飛魚、狀如豚。又云、鱨鱨魚狀如鵲而十翼、亦能飛。何羅魚一首十身、亦見山海經、音如犬。婦人吐絲者、名馬頭娘、卽蠶所化。按山海經、嘔絲之野、在跂踵國東、有女子據樹嘔絲。鮫人見搜神記、水居如魚、不廢織績、泣則成珠。

木禾見淮南子、崑崙層城九重、上有木禾。清腸稻見王嘉拾遺記、食一粒一年不饑、然所出之處、乃樂浪之東背明國也、今作背陰國、誤矣。肉芝見寰宇記、興元府固縣斗山凡五穴、穴有千歲蝦蟇、名爲肉芝、食之壽千歲。今言小人小馬者、增飾之辭耳。躡空草見洞冥記、有子如芥、取置掌中、吹之卽長、食之可立空中、足不躡地。朱草見大戴明堂篇、朔後日生一葉、望後日落一葉、無金漿玉漿之說。刀味核見酉陽雜俎、祈連山有四味木、實如棗、以竹刀剖之則苦、木刀則酸、蘆刀則辛、金刀則甘。

君子國見張華博物志、君子國民、衣冠帶劍、禮讓不爭。大人國見山海經、大荒之中、波國山有大人國、大人市。毘騫國見南史、梁時中國始聞有毘騫國、在頓遜外大海洲中、其王身長丈二、頭長三尺、自古不死、國中人善惡及將來事、王皆知之。王作天竺書、可三千言、說其宿命所由、與佛經相似。聶耳國卽哀牢國、後漢書、哀牢人皆穿鼻儋耳、渠帥耳皆下肩三寸、庶人至肩而已。長臂國卽奇肱國、見述異記、國人機巧、能作飛車、從風遠行。跂踵國卽長人國、見文獻通考、在新羅東、人長三丈、鋸牙鉤爪、黑毛覆身、搏人以食。靖人國卽小人國、見文獻通考、在大秦南、軀纔三尺、懼爲海鶴所食、大秦國常保衛之。深目國卽一臂國、見山海經、一目在掌、蔽其面而居。穿胸國卽貫胸國、見山海經、其人胸中有竅。黑齒國見山海經、其人黑齒。歧舌國卽反舌國、亦見山海經。白民國進藥獸、見羅泌路史。狗國在南海中、見外荒記。鬼國見文獻通考、在駮馬國西、其人夜游晝隱、口在頂上。軒轅之邱、鳳歌鸞舞、見山海經。

女兒國、按南史謂在扶桑東、國無男、浴水則娠。然此書林之洋所入者、有女有男、不似此國。嘗見文獻通考、於此國之外、又有東女國西女國、俗以女爲君長、凡號令、女官自內傳、男官受而行之、則林之所入者似之矣。東女國於唐時內附、又陰附吐蕃、故其時號爲兩面國、是兩面卽東女別名、非眞以一人而具兩面者也。

胚火國見山海經、其人獸身黑色、火出口中。炎火山見元中記、四月火生、十二月火滅、滅後亦生草木、以木皮績之、卽火浣布。火山國見山海經註、其山雖雨亦燃、有白鼠毛可織火浣布。火林山見十洲記。兩石相擊、水中出火、見王嘉拾遺記。

璇璣圖見晉書列女傳。竇滔妻蘇氏、名蕙、字若蘭、善屬文。苻堅時、滔爲秦州刺史、被徙流沙、蘇氏思之、織錦爲廻文璇璣圖、以寄滔、宛轉循環、詞甚悽惋。一說滔鎭襄陽、攜寵姬趙陽臺赴任、蘇氏織廻文以寄、滔卽日迎之、情好如初。廻文廣八寸、凡八百四十字、得詩三百餘首。此書謂爲哀萃芳所繹者是也。　一九五七年古典文學出版社本

第二十三回引用文　「…元虛奧妙」の「元」字、上海古籍版は「玄」字に作る。康熙の忌諱を直したのである。

第九回引用文　「恰好此地有箇充飢之物」の「恰」字を上

海古籍版は「却」に作る。「卽放入口內」の「入」字、三本共になし。「……鵲山有青草」の「青草」二字、光緒三年刊本は顚倒して「草青」に作る。「……忽然路傍折了一枝青草」の「然」字、光緒三年刊本・上海古籍版は「在」に作る。「妹夫要這樣很嚼」の「很」字、三本共に「狠」に作る。「俺躡空追他」、上海古籍版は「俺攛空捉他」に作り、光緒三年刊本は「追」のみ「捉」に作る。亞東版は『史略』に一致する。「剛才唐兄吃的」の「吃」字上、三本共に「所」字あり、脫誤か。上海古籍版また「剛」字を「方」に作る。「你却從何尋找」の「找」字、光緒三年刊本は「我」字に誤る。以上の事例からして二三の異同はあるものの、『史略』引用は亞東版に據ると見てよいだろう。